# 繪本三國妖婦傳 下編一

へ13
2892
11

# 繪本三國妖婦傳下編卷之一

目録

玉藻前泰親と問答する玉藻前の圖
泰親関白忠実公の鈴（勘文を持参の圖
泰親内裏にて參内の圖
玉藻前泰親と殿上に於て問答の圖

門へ13
2892
11
昭和九年三月廿日購求

秦親恥辱城交戰 加茂大明神託宣
光明宮后穿り光城放の圖
惡鬼群て經城漬圖
異形虛空城充行きる圖
加茂明神秦親が僕童に然く託宣の圖

無斷轉載

絵本

# 三國妖婦傳下編敘

妖不克德信哉。夫呂望輔周開八百基。所君齊國而名高于後世。是呂望之德也。而妖爲之敵焉。者婆施

藥療億萬痾。所貴西域而術冠于古。是耆婆之德也。而妖婦之退焉。泰魏揲蓍察卦。幾所列公卿而業稱于末代。是泰魏之德也。而妖婦之潛焉。妖不克德信哉。抑見怪不奇無怪。





僧玄翁曰之故能鎮石魂云所謂德乃文也。自在治國家文武併用。所謂武乃兩女之功是也。今茲妖婦傳下編刊成。因次敎言述

# 巻端に示す

文化二年乙丑仲春望

高井伴寛思明

山章水書



玉藻前恭親と問答玉藻前が舞古狸沈鬱の
云程ふ主上を恭親が勅文の旅館閑ありとのたまひ出羅生門ふら
ざる玉藻前いうでうこと他ふ屋に光帝うり朝恩を蒙る坂部
右近将監が嬢に相違あるまじ何を以て怪むべきいかなる
もこれかしこと婆国の旅其侍ふ打捨ものひ罷遇賛うの
あれふを悩ますに暑らせのふ安倍恭親いうもて如意
ふ面沈物ふ思ひ易を取て考ふるふとゞめ玉藻の恭が
生得占卜の面ふあるこゝふあるふそ又も関白厨卜忠
寛その館ふ参りて玉藻を退市ゐバ主上の出悩を立所ふ

玉藻前
恭親と
殿上に於て
問答
の図

平金吾まさんとふてつゝび勅文を奉て誠忠義心家綱公
及〻今まで殿下ふく感心あり何て此よ〻傾覆のし系内
あんて再び奉親ゲ勅文の旨奉達あり〻小君も再無歟
聞あることなきまゝ其儘ふも捨させらまゝて出仰のうゝふ
麗樣ゲ為やはしあふ玉藻の前を置所内側をくるれも
大臣参聞のこゝあり何も拘うゝふ思ひて何ふ思此は行く
ゆうけ参〻ひるゝふも奉親いそれあ紀事を慶て歳を思を
まゝ〻嘉祝さして妖怪化生ゲ陰〻徐言ゝ何ゝ言恨と
てかくのゝくあるや勅許もあるゝ奉親を殿上へ召書ふ
加ふ聞者ふ酒を飲ひ明白ふ分りて関白殿下ふ集ゲ虚

言をりて君ゲ親しむ処を恨前ふ言ひ〻て出ゝまんあるき
是を聞召ふ〻ひ〻ふ〻ふ〻ふ勅免あ〻ふ分ふ思召れ
この事ゲ行ふ〻ひ〻ふ定め殿上へ奉親を召さる旨と奉親
へ勅諚下ひ〻ふ奉親大ふ悦び玉藻の前ふ物を居
ふ旨と当日のふ〻ゲ召ふ〻ふ〻ふ〻ふ〻ふ今日大内ふ詣て
出罷妃玉藻の前と對面さ〻ふ〻ふ〻ふ奉親ゲ召れ
ふ〻ふ組門を通行ふ武家ふ〻ふ〻ふ〻ふ〻ふ〻ふ〻ふ
ふて指号あんとの命ゲ達せふる是ふ〻ふ方ふ〻ふ〻ふ〻ふ
主上ふ〻ふ〻ふ〻ふ〻ふ〻ふ〻ふ〻ふ〻ふ〻ふ〻ふ〻ふ
ふ〻ふ〻ふ〻ふ〻ふ〻ふ〻ふ〻ふ〻ふ〻ふ〻ふ〻ふ賢の格言宜ふ〻ふ〻ふ

三國妖婦傳下編卷之壹
三
書林合刻
三國妖婦傳下編卷之壹
四
書林合刻

一天子の主上玉藻の方の容顔ふ雲させのひ君寵深く成
ぬ寵妃を出し奉叡と共に同座させのいい系代未聞の出来事と
名顔を集て噂あつる是上の出情うを亀ふる和容色乃
美婦を出し政事ふ怠ひ四家より諫いあんと声小雷乃
無ぞるがと思ひ奉親を兼て達せ〳〵分別して
武家はうり系扣おきびゆがて義人元寂て席に通〳〵ける
上の間ふる翠簾きれ廻〳〵前の方に出て物語を挑む
そ紙の方を襖を引きて横の出間より公人大勢官位の種を
にて別座〳〵其下ふ殿上人位階よ出さうつて並居しより

位階の下ふる北面の侍百司の武士辯器の下い堂上地下の分陽
殿上員ふて是ふ成り奉叡を一間陽く未成ふ平伏せ奉叡
縁ふく官畢して成る内席ふ入るもと其例のあるざ和
未代ト家の面目ふりとうや時ふ出寵妃玉藻の方ふ
寵冠成いるを紀瓔珞荘明照やき身ふ羅綾錦繡
の五ツ襲前ふつぞるまの紙踏女官女嬬あるふ別つまま
雲間ふ出る月のごく美容の艶姿を顔を
面ざ〳〵ふるびるる牡丹のごく取ふり風俗を東風ふな
びく柳のいと艶ふ三十二相ふ成ふり楊ふ妃西施ハ
ふなる代乃唐人名ふ成ふ我邦の右通姫小野小町もいうでう

されば斯の姿をおのく見とれて心も空にうかれまよひける
蒙塵の業をおそりて纔に魂も身に添ぬ心地見えしまゐらせ
なりけり玉藻前が今殿上帝の内の中央禎不庭し
と稽されし皇后のもと帝乃清覚浅からぬも謹としき
思ひ給ひし安倍の泰親も自然と其威に心虜し平伏なし河
玉藻の前をひかに潤しれ泰して泰親よ今當今御悩は
深くもの心の寄に成卜して見んとぞ業なりと勘文を泰りは
いかに今まであり矣と尋に通して泰親謹とあげ臣敢よ
御悩重くも御身を臣として誰か知れ安ぜん其文相代し
傳ふる不能卜をもって理を推し易占演て数を考ふに

陰獣の崇ぞる所帝王の徳澤は蠹毒に其判読勘文不遂は所
のごしめして奏聞は遅くも也と其まゝ玉藻の前是は
聞陰獣といふばかり也て以のほか誠に思ひもたらね
愚昧の御明らかなる眼を見ましても盲に等し人畜は及ばず
んふかんぞ大逆しく易数に及ぜんも悩も是理をもって
いかん何ぞ天は風雲の変を通し地は又水火の災しきあり
天地もかくのごとし況んや人間はかなくとも不時の病死
無の病一天の君たりとも何ぞや是をのがるべき無常の
風に誘はれ死つて喉消の露の命も皆定まる因縁ある早
ふかく況河ぬて病又時来て治も死生命有皆天数の然らし

泰親
關白惠實公
館へ勅文を
持參
乃
國

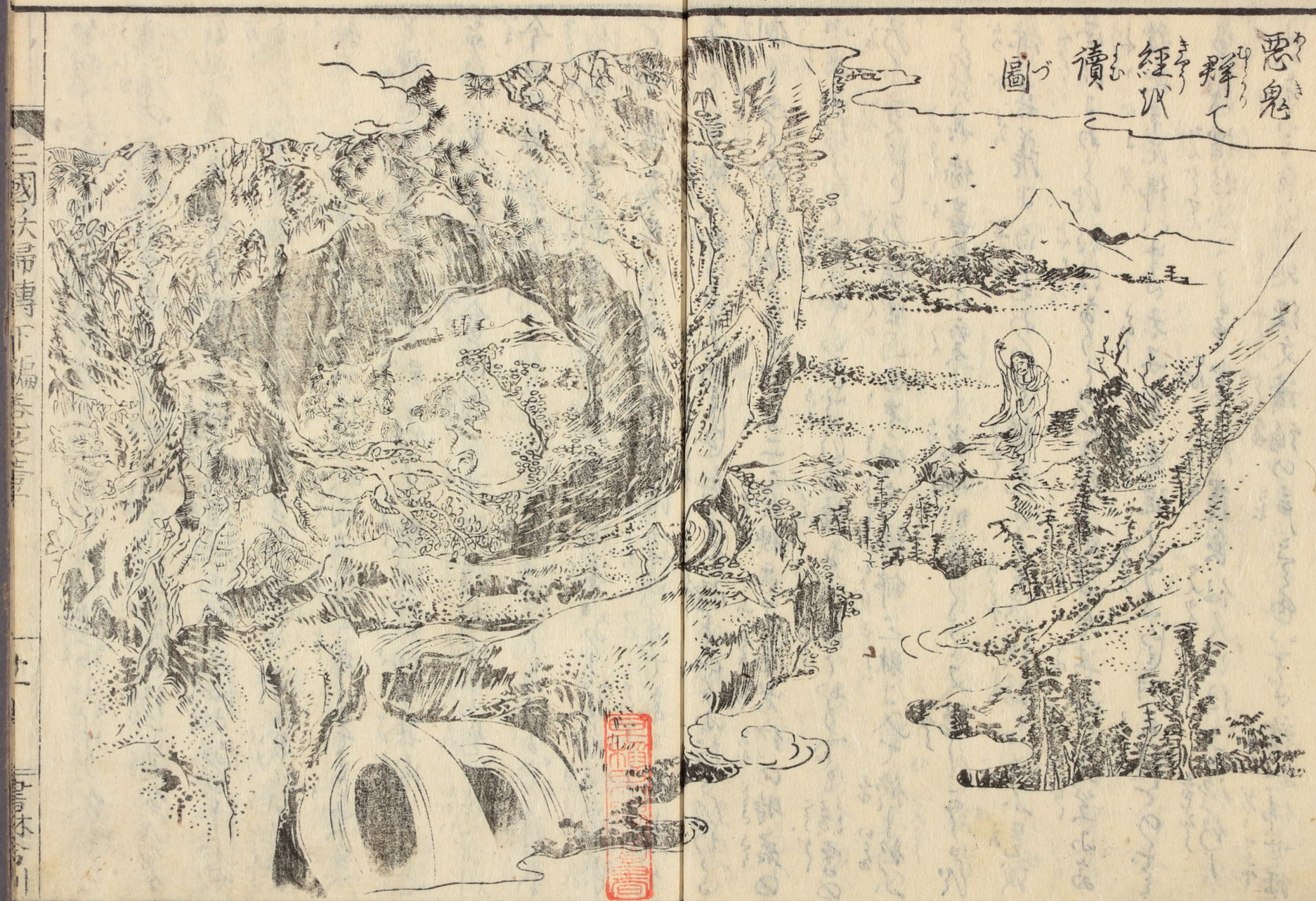
ものを見を悟まんものとうるを上の出海をふてこづ
が不為といふるの謂を支易数を河図の数を起り法範を
洛書の数よりこづき未然の吉凶悔吝ばかるこうまき天地の
理紙ばかりて人事紙ばかりをのはして鬼神もなみだをしぼる処
を知ることを日月の明るがごとし然に法今日の理にくくいん
を易数ばかりさて〳〵藁おもゝト者うて完ふとこゝへ濁
座の諸人嚴上人玉藻が遊ふ処理ふあるうて去るも無右爽
あるば紙感ばかり恭敬ふと言ふと雲堂をのんでいらるる
恭親恥辱を受る為加茂大明神蛇宣
河水恭親面に紅紙を大ふせ紙逆せ某が動文私の吉に

あるば伏義文王周公孔子の先聖弘ものひ〳〵易道又我邦
ふ伝ふる不の数理あり て悪く家ふ奥秘ふ某此道を伝て
推を不也又目前の理を伝ふ当秋ふる陽厳ふ法嘉の折
ふ灯火風ふ消ふらるきをば出身ふ光紙教ちものひ
ふ拝正法ふ不思議あり我も人も神の出来神躰ふ
人間乃身ふ光の出るやうやあふ是あやしむ屋さの
弟一ふ元来心身を右迫將監紗綾ふる身分の
ふ紀清水のかゝるふ錦ふつゝ捨あり紙捨ひあるて
育〳〵と金沢おがゝ慥ふ紙ふ真砂ふ苗はふる
屠しに誰あるふる紙捨ふ法法もあるば紙ふ出身

光明皇后
身を以て
救ふ図

いうもなくその亂あるやあやむべきの世二くゝ〻ゝ城さて
玉藻のおもひあゞ〻泰親を縛〻惡病の生質ゝ
のゝを捨ゝ行めて我捨〻ゝと名乗ることのくあべきや
是汝がうゝ紀世一なり正法なる不思議おそれば人の身より
光城殿を況ゝ怪〻〻帝の御惱をこゞゝゝ不為ゝ況
ゝゝゝゝや允恭天皇の后衣通姫い惣身ゝゝ清衣乃
外まで通ゝ衣通ゝ名づゝ人皇四十五代聖武天皇の
后を羅系淡海公乃女ゝて佐身ゝ光城殿ちのゝ
光明の二字況授ゝゝゝ光明皇后と孫〻
是帝叡感のあり出賞ゝ勅使ある事況

あゝゝゝ諸人知ゝざるものゝ怪とふたゝびある
例もゝゝざるゝ汝がうゝ紀世二ゝ挾ゝ不易者何の時者の
出用ゝたゝんと思ゝやいひ法も絶ゝ後世の
為ゝ賢ゝ乃遺望国の僧言後佛三昧ゝ入て修行ふ
ゝゝゝ真像菩薩ゝ変〻光明かゝゝゝ又ゝ〻ゝ
佛菩薩ゝ白毫あり赫光ゝ光城殿ちのゝ是城
正法ゝあゝ形法ありゝゝゝまゝ其むゝ天竺ゝ
釋迦牟尼佛いまゝ太子ゝ悉達と号ゝ是時王位をのゝ
あゝ檀特山ゝゝ事ゝ阿羅良仙人に仕て修行
山を下ゝのひゝ処經文讀誦の声ゝ西いまゝ釋迦佛世經


惡鬼
釋て
經巻
讀
圖

を祈りあがるのへ前縁をうけ苦を離へ彼岸よりうかのうら
讀誦の声も止まずとそれ悪鬼共異形を見て見ひるま
に悪鬼ども群をなすより惟今經典よりの海水あつまりや
今又我は讀誦して法華経を頼めへ苦ていまく我くは行食
物なく肌を脱んで言葉じ人間の肉をあしもそも与へへ
と釋迦是聞ゆて則こづく股切り其肉をあり
あれば鬼ども怪び食ひ經典讀む釋迦ゆて是を覚へ
今の四句の文是也さて仏法はうむ色とあへ用長
長者とりつる形曲淑乃の者あつて事ありがく仏弟子
を仏道に入きんと思ひ阿羅漢達に連て毎日長者が

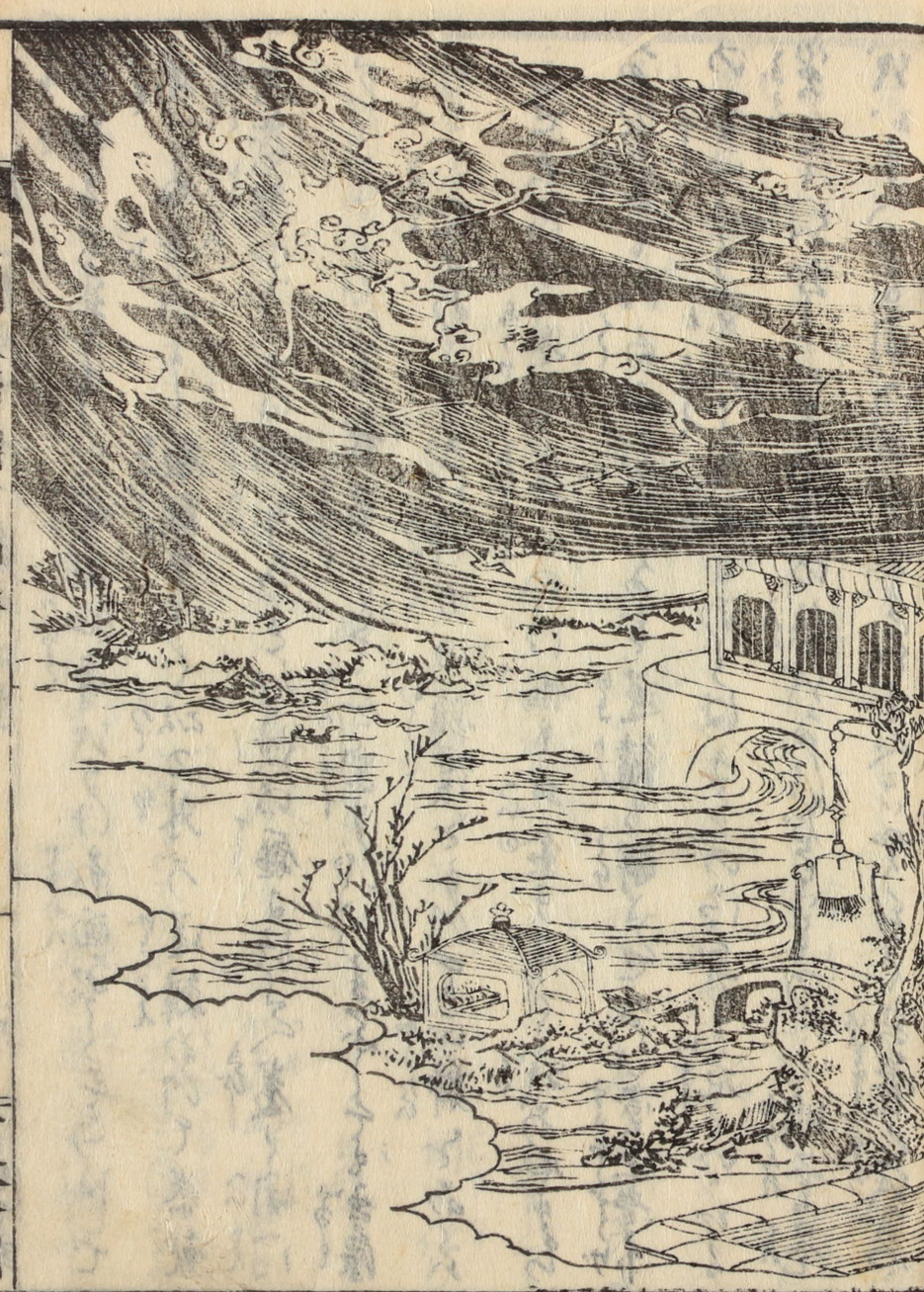
門小立て敬謝をなすまで一銭も絶さ是それを接
毎朝ごとに一銭の両福濤の海小差に入れさまつ色斗を
つくりなつて形見ゆ形見ゆ是のものを苦乃より引
入きあば諸人のうつ伏ーと思ひ伏あぶつ
空よ前形なる異形をんぶ死病をうんと云ふ
が言人の嬢子と病よ空死の鬼かを見へけは無身
癒ば生ー既に命危くへあれば流石形見の長者れ
どもふひうれて色あうに形斗ー釋迦是をあひ
病事斗ー命ーはんん頼よ者をて宮へ入で癒ふまうか
親公形見淑乃を高きておうとて頼ひよ者を空今ち

七日の中に平復させん今日より公が道を慈悲を施し
三宝を信じ給ひなば忽ち平癒なさしめん宝心が娘がいたされ
一公は慈悲を布し三宝を信ぜしかば七日に満る夕方娘が
病も愈え平愈し平常になれり是より長者仏法の妙なること
を感じ釈迦仏の御弟子となりて仏法に帰依し
隠りなき慈悲者となり祇園精舎を造営して仏に施し
正法を以て法を弘めたりされども弘まりがたく正法のすゝめ
乃ち猶ふかき不測をなし凡そ後の仏法を記し三國に
弘まりし是より以て天竺にて正法は不測なりといひける
ことかうして身より離れ光も光明皇后の光も釈迦仏世尊



あれ異形のものは虚空に飛行なさしめ悪病をうけさせしむ
ところなき理を示し不思議と云へども正法と是なりても正法
不思議なりといふべし一言半句説きしにて水の流るゝ如くに
仏の教へに帰身つかれ汗を流し是を以て聞けるに玉藻のま
声なく汝又いかならば速やかに答へ詞もなく
御しとて遁れ給はん経文をとなへ給ひしまぞ
御辺後は玉ふやいかにまで此上は詞もわなゝきてぞ答へける
玉藻の前はたちまち退きまゐらせ業を励む
返しと恥しく附ける国院さまと志つくしと立入ける列座乃
公卿殿上人玉藻の前の英明智識者を巻くぞ感ぜり

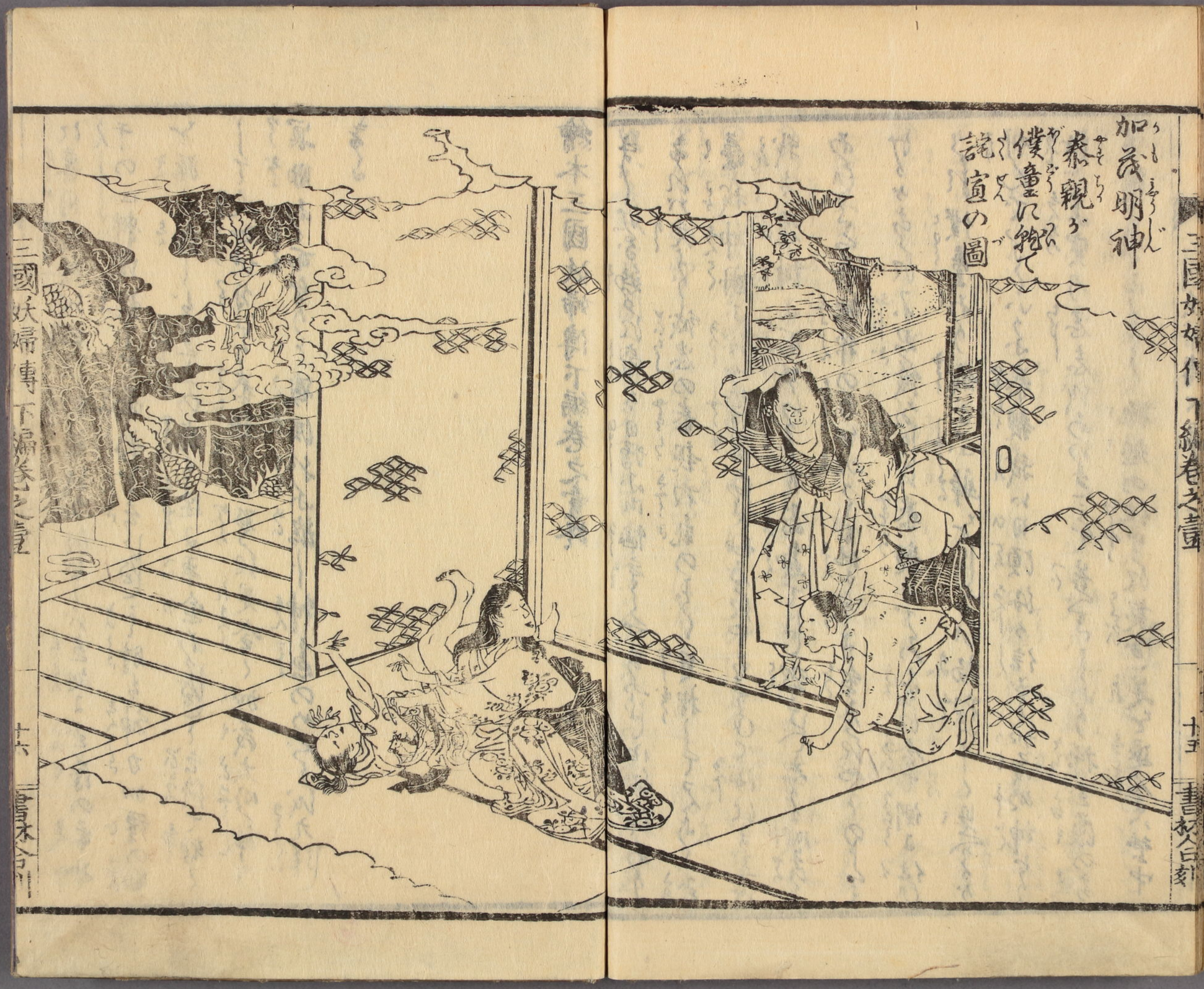
異形
虛空を
飛行する
圖



泰親はくまじが席に祗候し赤面ながらもことばして
退きしが帝には叡聞ましまし殊の外の逆鱗ありて泰親
急度咎むべしとの勅命ありければ綾の簾にへだてゝ厳く閉門
させられしかバ泰親謹慎して御楽ずいつまでもおそれ玉藻
の前人間にあらざれバ神力の擁護をもつて正躰をあらは
させ大内を退きまゐらせ主上の御悩も平癒ましまし我あやまちなし
なれ共もはや明白にかへるとも逆鱗も解させ給ひ当上の御後
の安心なり楽しみ御側にあらば主上の御身も危くいらせ給ふ
罷るべき引出し一天四海の慈悲なればとてもなく明らめ是
非あれども閉門の身なれバ是非なく只管に祈るや



ましけるが魔道に帝は日増に御悩重らせ給ひ給はず治療あり
あれバ妖より誠忠の泰親頼気のごとく只祈りしてのみ玉
藻我神國に汝が障碍をなさんとやなるらんと思ひて汝には〜へバ
我は罷り科に赦されぬ是非なく殺生石の志あるは
あひがたらんや諸神の力を以ても禁中に在をのがるや
けるがあれ不思議なりし泰親日ずんぞ是に命て側に仕ひ
られ僕童あり織に正躰をしらひ物ありしく見せてるが
叫んでいく泰親我は日頃汝が信ずる加茂明神なり
汝が真実の忠志なるまでに嘆べきにあり掃玉藻の
を汝が察するごとく狐魅の化せし殺生石を退んに禁中


加茂明神
養親ゞ
僕童に勢て
詭宣の圖
三國妖婦傳下編卷之壹
十五
書林八百刻
三國妖婦傳下編卷之壹
十六
書林八百刻

に蓋用の弦弧形の形福弧なるゝを処より玉藻の霊神
千の玉體成現して帝都を去る時も神力加護の助
を添んと願ゝ主上の病も速に平癒あるべしと云終て暫く
して人々地獄より恭親大王に是全く加義大明神の
冥助ある所なりと感涙を流し神恵のめぐゝ成九霊
きる

繪本三國妖婦傳下編卷之壹終